

## アワーミュージアム

第17号 2001年10月10日発行



## 身近にあるウキクサの種類を調べてみよう

きのした さとる  
木下 覺(友の会会員)

ウキクサは、水田やため池などによく見られる浮遊植物です。一般的にはウキクサとアオウキクサがよく知られていますが、私たちの身近な所にはその他にもいろいろな種類があって、調べてみると大変おもしろい植物です。

体のつくりはごく簡単で、水面に浮かんでいる部分と根の部分からできていて、茎にあたる部分は見あたりません。水面に浮かんでいる部分は葉のような形をしています。この一部分に花を咲かせ茎のはたらきもしているので、普通の葉とは区別し葉状体と呼んでいます(図1)。その中央部から水中に根が出ています。これが「おもり」の役目をしているので、常時同じ面を上にして浮かぶことができます。

徳島県に見られるウキクサのなかまは1枚の葉状体から出ている根の数などを手がかりに次のように分けることができます。

### 1 ウキクサのなかま(根が2本以上あるもの)

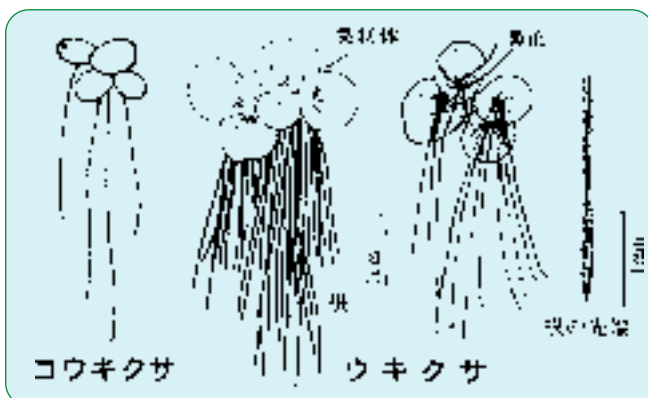


図1 ウキクサ類のつくり

### (1) ウキクサ

昔から水田などによく見られるものです。その特徴は、葉状体がアオウキクサなどに比べて大きく、1cmほどになるものもあること、葉状体から3~20本ほどの根が出ていて、裏の面が紫色をしていることです。徳島県では以前に比べると除草剤などの影響で少なくなりましたが、水田を調べるとすぐ見つかります。

### (2) ヒメウキクサ

ウキクサに比べると葉状体は小さく2~4mmほどしかありません。アオウキクサの大きさと変わりませんが、葉状体の裏面が紫色で、根が2本以上あるのでウキクサのなかまだとわかります。土成町で生育していたという記録がありますが、ウキクサの小さいものとまちがえることがあり、今はいくら探しても見つかりません。皆さんも調べてみてください。

### 2 アオウキクサのなかま(根が1本のもの)

葉状体は3~5mm程度で、ウキクサに比べてはるかに小さく、根が1本しかありません。さらに根の先端が針の先のように鋭いものと、そうでないものとに分けることができます。

### (1) アオウキクサのなかま(根の先端が鋭くともがるもの)

#### アオウキクサ

葉状体は薄く、ルーペを使うと3本の脈がはっきりと見えます。根の基部を顕微鏡やルーペでよく見ると、半月状の薄いひれが根を両側から挟むようになっています。種子を作って、冬には枯れて見られないことも特徴です。市街地に近い

水田では減少していますが、郊外や山村の水田などにはまだ多く見られます。

#### ナンゴクアオウキクサ

葉状体はアオウキクサに比べて厚く、ややレンズ状をしています。多くは3脈がはっきりしません。根の先端は鋭くとがり、基部にはアオウキクサの特徴である半月状のひれがあります。冬でも葉状体が枯れず、水のたまった水田やハス田、ため池などで見られることが大きな特徴です。

(2) コウキクサのなかま(根の先端が鋭くとがらないもの)

#### コウキクサ (図2)

葉状体は厚みがあり、レンズ状です。根の先端は鈍く、付け根にはアオウキクサのようなひれがありません。葉状体は冬にも枯れず残っています。県内のハス田や水田、用水路などに広く生育しています。特に冬季は溝や水路などの水たまりなどでよく見られます。葉状体が紫色を帯びるものをムラサキコウキクサとよびます。

#### イボウキクサ

ヨーロッパ原産の帰化植物。葉状体の裏面がイボ状に大きく膨らみ空気をたくわえた浮き袋になっています。水の汚れにも強く、鳴門市、松茂町、徳島市などの用水路に大繁殖していましたが、台風11号の後では流されてほとんど見られなくなっていました。日本全体では帰化している所がまだ限られている、とても珍しい種類です。



図2 コウキクサとミジンコウキクサ  
ミジンコウキクサがコウキクサの間をうずめている。

#### 3 ミジンコウキクサ(根がないもの)(図2)

葉状体の大きさはわずかに1mm以下の楕円形で、コナウキクサともよばれます。上面が平坦で下の面がふくらみ、常に平坦部を上にして浮かんでいます。小さくても花を咲かせるので、この花を顕微鏡で見た人は世界で最も小さい花を見たこととなります。鳴門市、松茂町、徳島市などのハス田や用水路、ため池などに見られますが、他の地域にもあるのではないかと思います。

徳島県で観察できるウキクサをとりあげましたが、このほかに本州の日本海側にホクリクアオウキクサ、南アメリカ原産の帰化植物でヒナウキクサ(図3)などもあり、徳島県に見つかる可能性もあります。自分の身近な地域にはどんなウキクサがあるかを調べてみましょう。



図3 ヒナウキクサ(佐賀県産)

#### 名西郡白鳥村絵図について

はやま ひさお  
羽山 久男(友の会会員)



絵図はおもしろいものです。そこに描かれた情報が多くのことを物語っているからです。ここでは、文久2年(1862)に作成された名西郡白鳥村絵図(徳島県立博物館蔵)を紹介してみましょう。白鳥村絵図は図1のようなもので、1間(181.8cm)を絵図面1分(3.03mm)で表した縮尺600分の1の正確な実測図です。白鳥村は江戸時代の名西郡内38ヵ村の1つで、江戸時代の正

保頃（1640年代）の村高254石余、文化10年（1813）には330石余の比較的小さな村で、藍作もみられました。現在は石井町の南東に位置し、徳島市国府町との境付近にあり、村の北側

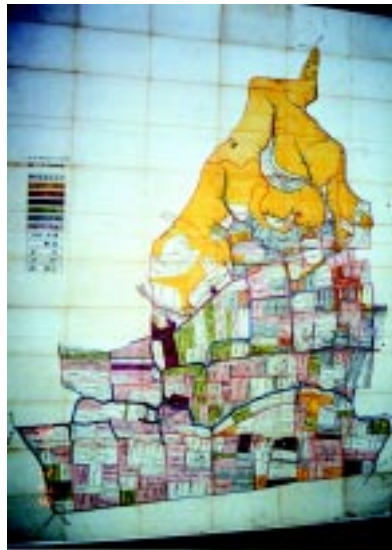


図1 白鳥村絵図  
寸法 158 × 203cm

は国道192号線と接しています。宅地化が進み、絵図に描かれたような近世の村の景観はすでに失われています。

村の南部分は絵図では黄色で示された山地で、<sup>きのべやま</sup>気延山の北に連なる<sup>ちやうすやま</sup>茶臼山（標高72m）には絵図では「古城跡」とあり、鎌倉時代から戦国時代の<sup>とっさかじょうせき</sup>「鳥坂城跡」とされています。その西には「白鳥大神宮」が描かれています。平安時代から祭られていたとされる非常に古い神社で、現在の白鳥神社です。また、東から西には鮎喰川の左岸にある名東郡の<sup>えんめい</sup>延命村（現国府町）から取水し、天正17年（1589）にはすでに利用されていた<sup>したらい</sup>下羅井用水が流れています。

白鳥村絵図の縮尺は600分の1ですが、徳島藩では、1丁（109.09cm）を絵図面2寸（6.06cm）で表した縮尺1,800分の1の<sup>ぶんげん</sup>分間村絵図が、文化から文政頃（1804～29）に数多く作られました。伊能忠敬が淡路から撫養にきて土佐の甲浦にいたる紀伊水道沿岸を測量した文化5年（1808）には正確な分間村絵図が既にでき上がっていました。

白鳥村絵図（図2）と分間村絵図の違いは、次のとおりです。白鳥村絵図では、縮尺が3倍の大縮尺の絵図で、分間村絵図では表現できなかった田畑が1筆ごとに正確な形と面積、<sup>なおいん</sup>検地帳の名負人（年貢を負担する農民）が記載されてい

ます。村の家屋が1棟ずつ、<sup>かわらぶき かやぶき</sup>瓦葺が茅葺かの違いまで描かれており、藩から6名の藩士に与えられた田畑（給地）が1筆ごと色分けして示されています。さらに、1筆ごとに配水される下羅井用水の幹線と支線やあぜ道、水路をまたぐ小さな橋、竹やぶまで正確に描かれていたり、村人の信仰の対象となった<sup>ふなと こうしん</sup>阿弥陀・舟戸・庚申・若宮・<sup>のがみ</sup>埜神・山神・地神・祇園社等が1つずつ描かれています。

検地帳に記載されている田畑のある場所（当時の<sup>こあざ</sup>小字）や藩士が拝領した1筆ごとの耕地が村のどこにあったかということなどが、この絵図から明らかになります。これらは大変重要なことで、江戸時代の村の生産（田畑・用水・小さな道）や生活・信仰・民家の配置、集落の南の<sup>さとやま</sup>里山にある<sup>いりあいやま</sup>入合山（共有林）等、文久2年当時の村の景観がいきいきと現在によみがえります。

徳島藩では、藩士に<sup>きゅうち はいち</sup>給地（<sup>じかた</sup>拝知）を与える地方<sup>ちぎょう</sup>知行制が明治維新まで続きました。白鳥村絵図は図1・2で示したように6名の藩士の知行地が色分けで示されている給地絵図でもあります。幕末の安政4～6年頃（1857～59）の徳島藩の藩士5561名のうち、給地をもらっていた高取藩士（<sup>たかとりはんし</sup>約50石以上）は628名で、全体の11パーセントにすぎません。白鳥村絵図は藩政の基本をなす地方知行制について、高取藩士の知行地の空間的な配置の状況を、村段階で把握するために作成されたものと考えられます。



図2 白鳥村絵図の部分  
下羅井用水の分岐点付近

## 博物館紹介16



## 菘翁美術館



いしはら すずむ  
石原 侑（友の会会員）

夏目漱石の「坊ちゃん」を読むと、古賀先生の送別会のところに床の間の「海屋」の書の掛け軸のことが書かれている。この「海屋」は阿波出身の「貫名菘翁」の別号である。

貫名菘翁は安永7年（1778）3月、現在の徳島市弓町1丁目で藩士吉井直好の次男として生まれた。生誕地に小坂奇石さんの書かれた標柱がある。「貫名」というのは祖先の旧姓とのことで、儒学者として身を立てるようになる27才から名乗っている。

幼時から儒学や書画を学んでいて、17才のとき叔父を頼って高野山に登り学問を修めた。その時空海の書に感動して努力を続け、後に「幕末の三筆」の一人といわれるほどの書家になった。

34才から京都で儒学を教えながら書や絵の研究につとめ、また京都・大阪などの文化人との交流を深め、しだいに有名な学者になった。

菘翁はずっと京都に住み、85才の春に中風を

患ってから気迫のこもった傑作を書き「中風様」と呼ばれている。文久3年（1863）5月、86才で亡くなった。

書や絵のほかに詩文でも有名で、活動が多方面にわたっているだけに使った名前も沢山あり、最も知られているのが60～70才ごろの「海屋」、70才以後の「菘翁」で、京都・大阪を中心に数多



貫名菘翁生誕地の標柱

くの作品が残っている。

郷里の徳島にも多数の作品が残っていたが、昭和20年の戦災でほとんど焼失した。書道家の田中双鶴さんは、

菘翁の作品を収集することに永年つとめ、質の高いコレクションをつくられた。昨年、成田山書道美術館で開かれた「貫名菘翁展」は双鶴さんのコレクションと研究を元に行っている。この全国に誇ることができるコレクションとそれを収めた美術館が徳島にあることを知らない人が多い。

「菘翁美術館」は、徳島地方裁判所の南側で国道を東へ渡り、最初の交差点から二軒めにある。建物は普通の民家だし、標示が奥まったところにあるから気がつきにくい。開館日が限られている上、インターフォンで観覧の希望を伝えなければ開けてくれない。

2階全体が展示室になっていて、双鶴さんが集められた質の高い書画が、ぎっしりとつまっている。大部分が菘翁の名であるが、海屋・海客の名のものもある。

個人経営の美術館では、常時開館はできないだろうが、春・秋の好季節だけ開館しているところも多い。この方が観覧しやすいし、運営に無理がないのではなかろうか。



菘翁美術館外観

### 菘翁美術館

開館日	毎月第2・第4土曜日
開館時間	午前10時～午後3時 (正午～午後1時休憩)
入場料	大人500円
所在地	徳島市新蔵町1丁目 TEL & FAX 088-653-2858

## 友の会行事報告



## 園瀬川探検（第4回）



第4回目は、当初3月25日（日）に予定していましたが、あいにくの雨のため延期となり、ようやく6月10日（日）に行うことができました。参加者は、寺戸会長をはじめとする会員7名と事務局職員3名でした。

今回のルートは図に示したとおりです（約11km）。石造物や習俗、伝説、地形、生き物...。バラエティに富んだ見学と会話の中で、新しい発見の楽しみに浸りました。

以下では、参加された会員の「探検記」を掲載します（順不同）。それぞれの関心から書かれているので、地域を探索するおもしろさが伝わってくるものと思います。

.....  
 今回は、川西<sup>しもまち</sup>～下町<sup>はなぶさ</sup>～花房の集落とその道中を歩いた。少々暑い日だったので、水辺に目がいく。田圃や小川の水草の間に、井守<sup>イモリ</sup>、青大将<sup>アオダイショウ</sup>、縞蛇<sup>シマヘビ</sup>、メダカ<sup>メダカ</sup>、トノサマガエル<sup>トノサマガエル</sup>。目高等々。殿様蛙も十数年ぶりに見た。

何度となく往来している下町集落の中にある気

づかないほどの小さな坂の上が、園瀬川と鮎喰川の分水嶺であったのは、意外性もあり、一番の感動だった。（山地 武彦）

津田橋から出発した園瀬川探検も4回目を迎えました。文化の森の前を流れる園瀬川に沿って下流から上流まで歩いてみようという壮大で魅力ある試みに参加できる喜びを毎回、一步一步自分の足で歩きながらかみしめています。

歩いたことのない道、行ったことのない場所、だけれども普通に人々が生活を営んでいる場所の中に、「文化」や「文政」といった銘が刻まれた石碑を見かけたりすると、もうそれだけで歴史の一端にふれたかのようにワクワクしてしまいます。

毎回いろんな発見のある園瀬川探検。寄り道もいっぱいしながら少しずつ上流へと向かっていきます。

.....  
 上中筋<sup>あた</sup>辺りの稲の苗が少し大きく緑を濃くした田の真ん中<sup>あた</sup>に、ポツンとそこだけ小高く土盛りをした塚があり、墓石のように2つの石が並んでいました。それは、長男（跡取）が早死にしたら、自分の家の田が見えるように田の真ん中に墓を建てるということでした。

多家良町にも一カ所田の中にポツンと小さな石



ルートマップ（国土地理院1/2万5千地形図「徳島」・「石井」より）

は出発・終点の上八万小学校

1. 田んぼの中の墓
2. 諏訪神社
3. 墓・板碑
4. チャートの小石を用いた塀・祠堂
5. 伏拝八幡神社
6. 江戸時代の墓・石碑
7. 西願寺
8. 地神
9. 諏訪神社の札

塔が建っているのを知っていますが、関連があるように見受けました。

<sup>ふしおがみ</sup>  
伏拝八幡神社より少し歩を進めると、一宮配水場のある場所に出ました。普段、車でしか来たことのない場所で、随分遠くへ歩いてきたものだと思います。ここから鮎喰川はもう間近で、この付近が鮎喰川と園瀬川の分水嶺になっている場所らしいと知りました。

神社を出発する時に佐藤学芸員と寺戸会長との興味深いやりとりがありました。過去に鮎喰川が洪水をおこして園瀬川に流れ込まなかったかということですが、佐藤さんによれば、園瀬川に見られる魚(ムギツクというコイ科の魚)が鮎喰川には見られないことから、たとえ洪水時に両方の水系が繋がったとしても、鮎喰川の方が水系規模が大きいので、鮎喰川から園瀬川に流れ込んだことがあったとしても、その逆はなかったのではないかとのことでした。

花房地区からの切り通しの入口付近の片側に、竹を割ってお守りをはさんで立てたものがありました。切り通しを抜けた付近の畑で作業をしていた男性に聞くと、佐藤さんが聞き取り、悪い病気の出入りを防ぐ意味があり、隣りの集落との境界線の所(この部落では3カ所)に立てるそうです。

お正月と秋の稲刈り後に「おひまち」と言って集落中の人(今では60軒程、集落の約半数程)がお宮に寄って御神酒をいただいて深夜12時頃に帰る(以前は太陽が出るまでいる)ということ



鶴熊橋から園瀬川の魚を観察する

しているそうです。(南部 洋子)

楽しみにしていた園瀬川探検日の朝は、柔らかな陽光が射し、涼風が頬をなでる絶好のウォーキング日和となりました。自然がいっぱいの園瀬川中流域を流れに沿って歩いていると、川面からにわかには青鷺が2羽、羽音をたてて舞い上がり、流れの上をぐるりと飛翔してくれました。小鳥のさえずりが静かな木々の緑にこだまして気分は爽快です。

上八万町川西地区から下町一帯はきれいな青田が広がる田園地帯になっていますが、周辺の屋敷は立派な石垣の上に建てられ、この辺りの土地が低いことが分かりました。農道の際に「剣山」の文字と昇り龍が描かれた石碑が建てられているところを見ますと、大雨が降るごとに濁流に悩まされ、大きな被害を受けてきた農家の方々の心痛と祈りが感じられました。

諏訪神社に3基の<sup>いたび</sup>板碑があり、そのうちの1基は鮮やかに<sup>なむ あみ だぶつ</sup>「南無阿弥陀佛」の文字が残っていました。板碑は石造の卒塔婆であり、死者の追善供養などのために建てられ、緑色片岩で造られているものが多いようです。明徳4年(1393)の紀年銘は数百年の風雪にさらされてきたことを物語っていますが、物質的に残っているというよりも、人々の心が残っていると思いました。

<sup>ば とうかんのん</sup>  
「馬頭観音」と彫られた小さな石仏がたくさん無造作に並べられているところへ案内されました。馬頭観音は恐ろしい顔立ちをして頭上に馬頭



川西諏訪神社東方の剣山の碑を調べる

を載せた観音です 疾走するかのように魔を退ける様を馬で表現したとされています 馬が農耕や運送の手段として普及するようになった江戸時代に馬頭観音の石仏が数多く造られたそうです 農家の人々の馬に対する思い入れが強かったことの流れではないでしょうか。



伏拝八幡神社にて

下町の伏拝八幡神社へやって来ました 屋島への行軍を急ぐ義経がきらびやかな鎧 兜に身を包み、名馬大夫黒にうち跨り、源氏の白旗を翻しながら下町を通りかかると、そこに八幡神社がありました。義経は、源氏の家祖・源八幡太郎義家に思いを馳せながら下馬して八幡神社に礼拝 戦勝を祈願したと伝えられています。「いざ屋島で平家を討たん」と身を引き締める、りりしい義経の姿が目に見えようです。後の人々はこの八幡神社を伏拝八幡神社と呼ぶようになったということです。

午後は、少し暑さが強くなり、足も疲れてきましたが、博物館職員の方々のガイドで楽しく勉強させていただき有意義な一日を過ごすことができました。次回の探検をとて楽しみにしておりますので、よろしくお願いいたします。

(多田 重利)



## 友の会行事報告



### 夜の昆虫かんさつに参加して

佐野 竹司 (友の会会員)



「夜の昆虫かんさつ」当日、集合場所に向かう車の中からすでに、ハイテンションになっていた息子二人は「オオカブトを捕るんだ!」と、おそらく日本では捕まえることのできないカブトムシを捕まえることを夢見て興奮していました。親は親で「オオカブトは無理でも、クワガタやカブトを捕まえたなら家で飼うようになるから、いろいろエサとかを買いに行かないといけないな」などと考え、クワガタやカブトが捕れないことは予想だにせず、ひたすら虫を捕まえた後のことを思案しておりました。そして、集合場所の駐車場で、自動車にひきつづされたカブトムシの死体を発見するに至っては、もうすでに、この夜のカブトムシ捕りは大成功の予感があふれていました。

集合場所ですでに捕虫網を振り回している息子達も、観察地に出発するころには少しは落ち着いて、「どんな虫がおるのかなあ」などといいながら、観察地点に向かいました。観察地点では、自然観察員の先生が、いきなり木の穴からクワガタムシをつまみ出し、親子共々これほど簡単に捕まえられるものなのかと感心しました。では自分たちも挑戦しましたが、なかなか思うようには捕れません。「やはり、むずかしいものだな」と、少し納得したり、「なんとしても一匹は捕まいたい」



クヌギの樹液に集まる虫を探している  
(2001.7.28 佐那河内村)

と思ったりしながら、これから飛んで来るであろうカブトムシ、クワガタムシを楽しみにしておりました。

結果的には、カブトムシやクワガタムシが飛んでくるのは見ることはできませんでしたが、コメツキムシ・ノコギリカミキリ・コガネムシ・カメムシ・ハサミムシ・アリ・バッタと数多くの昆虫が灯りに集まってきて子ども達は初めてみる虫たちに興奮して、親のことなど忘れて、虫に見入っていました。私たち親も童心に返って、ただただ解説に聞き入ってしまい、家族全員で十分楽しませていただきました。

後日、教えていただいたバナナのトラップを用いて、自宅近くでカブトムシのオス1匹、メス2匹を捕まえることができました。そのカブトムシは子ども達の宝物となり大切に飼われております。その他にコオロギが5匹、バッタ(名前不明)が3匹ほど我が家で飼われています。今も、コオロギの鳴き声を聞きながらこの原稿を書いています。夜の活動的な虫たちの姿に触れて、子ども達も今まで以上に昆虫に関心を持ったようです。

本当に楽しいひとときをありがとうございました。また、よろしくお願ひします。

## 友の会行事の記録

### 企画展 門出のセレモニー

#### 婚礼と葬送の習俗 説明会

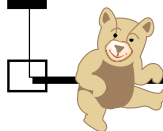
場 所：博物館企画展示室

日 時：8月5日(日) 13:00 ~ 14:00

講 師：庄武 憲子(博物館学芸員)

参加者：15名

## 会員広場



友の会会員の吉成宏さんは、自宅で藍を育て「藍の生葉建て」の試みをしているそうです。写真のハンカチは吉成さんが生葉建ての方法で染めた作品です。庭に咲いた桔梗ききょうの花を、ご飯のりを練って作った糊ではりつけて防染をし、模様をつけたそうです。

藍の生葉建てに関して情報をお持ちの会員の方、また興味がある会員の方がいましたら、情報交換ができたと思います。ぜひ博物館の庄武まで御連絡ください。



吉成さんの作品

## 《事務局からのお知らせ》

### 友の会行事予定

- ・特別陳列「勝瑞時代」展示説明会  
11月3日(土)・18日(日) 企画展示室
- ・第6回 園瀬川探検  
12月上旬 佐那河内村
- ・冬の研修会  
1月下旬 高知方面
- ・企画展「信仰と美術」展示説明会  
3月17日(日) 企画展示室

## 第17号

2001年10月10日 発行：徳島県立博物館友の会  
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館内  
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197

